

## ***M-GTA 研究会 News letter no.29***

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：[grounded@ml.rikkyo.ne.jp](mailto:grounded@ml.rikkyo.ne.jp)

世話人：阿部正子、小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾、坂本智代枝、佐川佳南枝、塚原節子、  
林葉子、福島哲夫、水戸美津子、山崎浩司

### <目次>

◇2008 年度総会の報告

◇第 45 回研究会の報告

◇近況報告：私の研究

◇連載・コラム：『死のアウエアネス理論』を読む（第 5 回）山崎浩司

◇編集後記

### ◇ 2008 年度総会の報告

下記のとおり 2008 年度総会が開催され、議案が審議され承認されました。2008 年度総会資料を添付しておりますのでご参照下さい。

【日時】2008 年 5 月 31 日（土曜日）

【場所】立教大学

【出席者】44 名

<会員（37 名）>

・鈴木依子（京都女子大学）・三輪久美子（日本女子大学）・光村実香（金沢大学）・塚原節子（岐阜大学）・納富史恵（久留米大学）・木室知子（久留米大学）・日野浦裕子（新潟大学）・河先俊子（フェリス学院大学）・佐鹿孝子（埼玉医科大学）・阿部康子（愛知県立内子高校）・市江和子（聖隷クリストファー大学）・宗村弥生（東京女子医科大学）・山元公美子（山口大学）・戸塚恵子（国際医療福祉大学）・歌川孝子（新潟大学）・内田雅子（大阪大学）・柴田弘子（産業医科大学）・大森佐知子（名古屋市立大学）・須々木真実（ルーテル学院大学）・塩塚優子（青梅慶友病院）・安藤晴美（埼玉医科大学）・加藤陽子（久留米大学）・功刀たみえ（法政大学）・田中梢（日本女子大学）・林裕栄（埼玉県立大学）・大澤千恵子（山梨大学）・小池磨美（高齢・障害者雇用支援機構）・小松まどか（高齢・障害者雇用支援機

構)・田中美也子(桜美林大学)・菅野摂子(千葉商科大学)・水戸美津子(自治医科大学)・小嶋章吾(国際医療福祉大学)・小倉啓子(ヤマザキ動物看護短大)・坂本智代枝(大正大学)・木下康仁(立教大学)・山崎浩司(東京大学)・佐川佳南枝(立教大学)

<見学者(7名)>

・油野規代(金沢大学)・堀口和子(神戸大学)・結城賢一(ルーテル学院大学)・相場真弓(新潟大学)・五飛(上智大学)・大塚綾子(新潟県立看護大学)・澤田杏子(新潟大学)

## ◇第45回研究会の報告

### 研究報告1

**発表者:**小池磨美(高齢・障害者雇用支援機構)

**発表演題:**精神障害者(統合失調症者)の就労支援における当事者のニーズと行動に応じた支援の展開プロセスについて(研究報告2と共通)

#### 1. 研究テーマ

現在、精神障害者の就労支援は、職業リハビリテーション機関や一部の医療・社会福祉機関などそれぞれの法的根拠や背景となる考え方のもとに、それぞれ独自の「就労支援プログラム」として展開している。それぞれの機関・施設が多様な展開をしている精神障害者の就労支援ではあるが、日常的に行われている実際の支援においては、当事者のニーズや希望に応じた、あるいは、当事者の認知や行動の変容を促すような支援者の対応が展開されていると考えられる。そのため、様々な機関・施設の精神障害者を対象とする就労支援における当事者のニーズや行動に応じた支援者の判断と支援行動、及びその変化についての分析を行うことで、多様な「就労支援プログラム」に共通する支援者の判断と支援行動のプロセスを示すことを目的とする。

#### 2. M-GTA に適した研究であるかどうか(研究報告2と共通)

- ・就労支援が支援の利用者である当事者と支援の実施者である支援者を中心とした相互作用を通じて展開すること
  - ・その展開には必ずプロセス性が伴うこと
  - ・分析結果をもとに、就労支援のノウハウを提示できるようなツールの作成を検討していること
- 以上の点から、M-GTA に適した研究であると思われる。

#### 3. 現象特性

心臓のポンプ運動と血液の循環、そして、それらの動きが人の身体機能をささえていること。

支援者の支援行動のプロセスは、常に支援者の判断をもとにして具体的な支援行動が起こされる

ている。この支援行動は、以前に行った支援行動の結果として現れた当事者の変化や当事者や環境の特性から生じた動きに応じて、再び、支援者の判断に基づいて行っているものである。血液の循環は心臓のポンプ運動により心臓から新たな血液が送り出され、体中を巡った血液が再び心臓に戻るといふ、繰り返しの循環運動がされているように、就労支援の支援行動も、基本的には当事者の意思決定を踏まえた支援者の判断をもとに就労支援活動全体に波及的に繰り返され、その結果や影響が再び当事者の意思決定を踏まえた支援者の判断の根拠となっている。

心臓のポンプ運動においては規則正しい拍動によって、血液は血管という常に同じ流れを通して再び心臓に戻ってくるが、このポンプ運動は支援行動の対象となる当事者や環境のその時々状況や課題に応じて、支援や働きかけの範囲や強さが異なった運動を複合的に展開している。すなわち、同時並行的に複数種類の支援行動を行い、それらの行動が相互に影響しあう状況が繰り返し、展開されている。

また、この循環は心臓と血液の流れの循環が身体機能の基本であるように、就労支援活動の基本として捉えられる。

#### 4. 分析テーマの絞込み

「支援者から見た就労支援のプロセス」を明らかにしようと分析を続けていく中で、支援者の理解と判断と支援行動との関係について、それらが質的にどのようなものであっても、当事者の意思決定を踏まえた支援者の理解と判断が支援行動を具体化させ、その結果やそれとは別に生じた変化が新たな支援行動の根拠になっていることが感じられ、最終的に「就労支援における支援行動のプロセス」を分析テーマとした。

#### 5. データの収集法と範囲(研究報告2と共通)

データ収集法:調査は、平成19年6月から平成20年1月の間に、17名を対象に、インタビューを実施した。インタビューは、各施設にインタビューワーが訪問し、支援者に対して各1時間半程度、半構造化面接を実施し、録音した内容について逐語記録を作成した。インタビューでは、はじめに「統合失調症者の就労支援で、いつもどんなふうになされていますか?」という質問を行い、具体的な事例等を交えながら自由に話をしてもらった。

表1 対象者の概要

	性別	経験年数	所属施設の種類の	就労支援のためのプログラムの特徴
A	女	20	就業・生活支援センター	施設内トレーニング(有期限・更新無)・ジョブコーチ
B	男	8	就業・生活支援センター	〃
C	女	5	就労移行事業所	〃
D	女	10	小規模授産施設	施設内トレーニング(有期限・更新有)・ジョブコーチ・過渡的雇用
E	男	22	クラブハウス	〃
F	女	23	就業・生活支援センター	〃
G	男	7	就業・生活支援センター	施設内トレーニング(有期限・更新有)・ジョブコーチ・グループ就労
H	男	6	就業・生活支援センター	〃
I	女	4	指定障害福祉サービス事業所	〃
J	女	8	就業・生活支援センター	〃
K	男	13	障害者職業センター	施設内トレーニング(有期限・更新無)・ジョブコーチ
L	女	12	障害者職業センター	〃
M	女	14	障害者職業センター	〃
N	女	25	障害者職業センター	〃
O	女	3	クラブハウス	IPS
P	女	6	精神科病院	IPS
Q	男	10	クラブハウス	施設内活動(無期限)・ジョブコーチ・過渡的雇用

範囲: インタビュー対象者の所属する施設等は、①障害者職業センターにおける自立支援事業のような基礎的な労働習慣の習得等を目的とするトレーニングなど就職活動以前のオフザジョブでの訓練(施設内トレーニング)または、施設内活動を実施しているところ、②施設内でのトレーニングではなく過渡的雇用のようなオンザジョブトレーニングを実施しているところ、③IPS モデルのように特定の訓練や職場体験などのトレーニングを原則として実施しないところの3種類に大別される。(①と②については、いずれかのみのところ有り、両方を併せて実施しているところもある。)これは、現在行われている就労支援の枠組みを網羅すべく、インタビュー対象としたものである。(表1参照)

#### 6. 分析焦点者の設定(研究報告2と共通)

「独自の『就労支援プログラム』に基づき、統合失調症圏の人たちの就労支援を実施している機関・施設において、一定年数以上の就労支援経験を持っている支援者」

#### <質疑応答>

SV:精神障害者の就労支援に関する先行研究は少ないのか。

回答:全体を網羅的に説明している論文はほとんどない。調査報告、事例が中心のものが多く、全体像を明らかにしているものは論文というよりは著作で、その方の考えを展開しているものが多い。

SV:精神障害者以外の他の障害者に対する就労支援とは、どのように違うのか。

回答:一般的な職業リハビリテーションの流れはどれも変わらない。支援者がどこに焦点を当てるかは障害によって違ってくる。意思決定が揺れ動いたり、定まらない。そこをどのように支援していくかが特徴。

SV:現象特性に関して、心臓のポンプ運動という比喻にいきついた経緯などについて。

回答:最初はエンジンがあるピストン運動のような気がした。スピード感があり、機械的である。た

だ、人によってスピードが変わったり、支援者が待つとかタイミングを計って、待っている部分があるので、実際はマシーンっぽくない。正常が規則正しいというのは当てはまらないので、心臓もいまいち。ポンプ運動が中心になっていて、枝葉に分かれていく、それが必ず収斂して戻ってくるといところがポイント。

SV:ポンプが支援する側だとすると、支援される側は血液にあたるのか。

回答:というよりも、ポンプそのものが相互作用の中でできている。当事者の意思決定を踏まえて初めてポンプが押される。そこは、共同作業に近い。支援者の意に反していても意思決定が尊重される。

SV:データ収集のところで、経験年数と3つの種類ですが、どちらがより大きなファクターなのか。

回答:その質問にお答えする前に、こういう形で限定を図ってよかったのかということもある。今回は就労支援の全体像を網羅することを優先したために、こういう形で限定した。今の質問にお答えすると、施設が持っている独自のプログラムの方が優先される。

質問:どこをゴールと見定めたプログラムなのか。

回答:就労してもどこかで問題が出てくるので、なるべく継続したい。本人が働かないと決めた場合は、循環図から外れていく。どういう条件のときに外れていくかは、表せていない。

SV:スタートはどこか。

回答:どこからでも始まりうる。仕事をしていても、困ったね、ということがある。

SV:大きく分けると2種類ですね。

回答:これから働く人と働いている人の2種類です。

質問:アクセスは雇用主から、本人から、家族からあるということですね。

回答:いろいろありますが、支援の中心は本人。家族は図に入っているけれど中心ではない。

質問:テレビで観たが、就職支援コーディネーターが雇用主と障害者をつないでいた。ここでいう支援者というのは就職支援コーディネーターのことか。

回答:施設ごとに独自のプログラムなので、名称は様々。

質問:支援者は統合失調症の人たちに継続して長期間かかわっていつているのか。心臓ポンプのイメージだと、また戻ってくことを考えながら支援をしているのか。

回答:対象者が就労を終えてまた戻ってくという意味ではなく、支援をしている間に支援の内容・方法を考えていくときにポンプ運動がなされているという意味です。

質問:3つの所属施設を網羅することで就労支援を網羅できるということですが、いっしょくたにするとかえって焦点がぼやけるのでは。

回答:一律にはいえないですけども、働き方が多様だというのはおっしゃるとおり。施設によって得意・不得意というのはあるが、分析の中では共通部分に注目した。

SV:データ収集に関して、3人がインタビューをしたとのことですが、インタビュアーの認識の違いについての配慮などはあったか。

回答:3人とも障害者職業カウンセラーとしての経験を持っているし、ある程度インタビューをする前にコンセンサスを作った。

(以下、結果図とストーリーラインを用いて説明)

#### <質疑応答>

SV:結果の中で最も重要な部分はどこか。

回答: 自己決定を支えて支援内容を吟味する。就労支援というのがその人の生き方を網羅する領域において、様々な支援行動を起こしているということになる。

SV:現場の方が使用するにはシンプルさが重要だと思ったので質問いたしました。まとめの部分が重要なのかなと思いました。こういう部分をまず前面に出すと分かりやすいと思います。

意見:生活支援とは異なり、就労支援ならではの意思決定支援の特徴があると思います。課題を設定していくような特徴があると思いました。その辺をもう少し詳しく見ていくと面白いと思います。

意見:モデルというよりマニュアルを提示されているような印象。繊細なところも重要だが、大づかみで把握するのも重要。印象では自己決定を支える部分と自己決定を実現する部分の2つに分けられると思った。

現象特性に関して心臓ポンプのところ、フィードバックが循環されていくところは家族心理学のシステム理論なども参考にしてみてもいい。

SV 意見: 動きの部分がいまいち出てきていないとのことですが、この現象をAからBへと動かしているのはこれだということをつかみつつやっていくとよいのでは。次の出来事がどのようにして起こっていくのか、ちょっと平面的でわかりにくい。

#### 11. 方法論的限定の確認(研究報告2と共通)

「5. データの収集法と範囲」のところで述べたように、就労支援の枠組みを網羅した施設を選択し、データの対象としたことで、就労支援のプログラム形態に留まらない、多様な支援形態に共通する支援についての分析を目指した。

#### 12. 論文執筆前の自己確認(研究報告2と一部共通)

この研究で自分は何を明らかにしようとしたのか(共通)

統合失調症者の就労支援を行っている支援者が、どのような判断や支援活動を経て、就労へ結びつけようとしているのかを明らかにしたいと考えた。

この研究の意義は何か

多様なプログラムのもとに様々な機関・施設で実施されている精神障害者の就労支援において、当事者のニーズや行動に応じたプロセスがあり、それに基づいた就労支援における共通する視点や支援行動が明らかになったことで、ノウハウの共有化に向けた試みとして捉えられること。

その結果、何が分かったか。つまり、この研究がオリジナルに提示できる結論は何か

就労支援の支援行動は、当事者の意思決定を踏まえた当事者や環境への働きかけとその両者のその調整として展開され、常に複数種類の支援行動が同時並行的に展開されている。その

結果と当事者と環境それぞれの特性から生じる変化が相互に影響しあい、再び当事者の意思決定から始まる支援行動が生じているといった循環式で複合的な支援行動を支援者が担っているということ。

現実的問題に対しても、理論的問題に対してであれ、どういうプロセスを明らかにすることができたのか

現在、精神障害者の就労支援は、従来から行われてきている段階的な支援プロセスとIPSに代表されるような当事者の要望に応じた、就職活動ありきのプロセスとが、そのエビデンスを競っている状況にあるが、循環式で複合的な支援のプロセスは、どちらのプロセスにも共通するものだといえる。

該当する場合には、どのような援助の視点が得られたのか

職業リハビリテーションにおいては、「職業相談」「職業評価」「訓練」「求職活動」「フォローアップ」という、プロセスが一般的に示されているが、このプロセスに縛られないで就労支援全体の動きを明らかにすることによって、支援行動が同時並行的で波状的に行われており、繰り返しの中で変化する循環式で複合的なプロセスから成り立っていることが示せるであろうこと。

#### <感想>

この半年間ほどデータに密着し、概念やカテゴリーを生成するという作業を続けていますが、まだ、データからの距離に揺れが生じてしまう部分や思考の整合性が不足している面が残っており、概念名やその関係性など結果図の表記に、あるいは、ストーリーラインの文脈の曖昧さとして現れています。このような状態ですが、発表の機会を得て、スーパーバイザーをはじめとしてフロアからも、刺激的なご意見をいただいたことで、現在までの分析作業に対する一里塚として励まされると同時に、課題への対応に方向性が見えてきたように思います。

いただいたご意見や質問を踏まえて、新たな課題に取り組んで行きたいと思います。

ありがとうございました。

## 研究報告2

**発表者:**小松まどか(高齢・障害者雇用支援機構)

**発表演題:**(研究報告1と共通)

\* 研究報告1と共通部分を除き、異なる項目のみ

### 4. 分析テーマへの絞り込み

支援者が当事者のニーズをどう受け止め、どのような支援を具体的に展開しているか等について、支援の流れや関係性に留意しながら、そのプロセスを明らかにすることとする。

### 7. 分析ワークシート

## 8. カテゴリー生成

## 9. 結果図

## 10. ストーリーライン

(7～10は、別紙を用いて説明)

## 12. 論文執筆前の自己確認(研究報告1と一部共通)

この研究で自分は何を明らかにしようとしたのか(共通)

統合失調症者の就労支援を行っている支援者が、どのような判断や支援活動を経て、就労へ結びつけようとしているのかを明らかにしたいと考えた。

この研究の意義は何か

これまでの事例や経験としての報告による断片的な情報ではなく、就労支援全体の動きを明らかにすることによって、統合失調症者に対する就労支援のノウハウを提供することができると考える。

その結果、何が分かったか。つまり、この研究がオリジナルに提示できる結論は何か

就労支援の支援者が支援を決定して先導しているのではなく、当事者とともに検討しながら、支援の方向性を決め、当事者が就労し、その就労が継続できるように、当事者に対してつかず離れず、支援を行っていることが分かった。

現実的問題に対しても、理論的問題に対してであれ、どういうプロセスを明らかにすることができたのか

始まりがあって終わりがあるという一方通行の支援ではなく、いろんな支援から別の支援にループしながら就労に向かっていくという循環を伴ったプロセスを明らかにすることができた。

該当する場合には、どのような援助の視点が得られたのか

就労へ近づくためのステップは存在するが、支援の時期として縦割りで行われるのではなく、いつでもどんな支援でも受けられるといった支援の場が解放されていることがわかった。

## &lt;質疑応答&gt;

SV: 先ほどの小池さんの発表との位置づけ、特に分析テーマをどのように分けて設定したのか。

回答: 小池さんのように支援の関係性ではなく、支援の流れを重点的に見ていった。

SV: 伺っていて流れが見えるように、まとまっているなと思ったが、中心的なコアカテゴリから周辺カテゴリに分かれていくわけだが、それぞれにこういった要因が関わっているのか、いまいち図からはよくわからなかった。

回答: 何が起きて動いたのかの詳細については、データから読み取ることができなかった。支援者と当事者が働き方を考えて、支援の方向性を決めて支援に移っている。もっと細かく見ていく必要がある。

SV: 就職へのチャレンジ、というのは誰の視点か。支援者か。

回答: 支援者が就職へのチャレンジを支援すること。



**意見:** 結果図の概念について、支援者・当事者の視点を工夫するとよいのでは。概念名だと、長さの制約もあるかもしれないが、ストーリーラインの中で視点がはっきりするように説明を加えていくこともできる。

**質問:** 概念名について分析焦点者が誰なのかが分かりにくい。図が複雑で、楕円があったり四角があったり、楕円の中に四角があったりして、色々あってどういう意味があるのか分かりにくい。当事者の判断分岐支援というのはどういう意味なのか教えて欲しい。

**回答:** 当事者と支援者がこれからどうするかを決める判断分岐の場所と考えた。

**SV:** 特にコアカテゴリなので重要だと思う。これの定義が分かれば。

**回答:** カテゴリーに対して定義をきちんと作ってなかった。説明できるような定義を考える。

**質問:** 「支援者の判断」というカテゴリの意味が分からなかった。支援者の判断というのは全体を表しているはずなので、ここにはもっと適切な名前がくるのでは、ここに支援者の判断がくるのが分かりにくい。

**回答:** この「支援者の判断」のカテゴリーでは、支援者の中だけの判断なので、当事者も含めた判断は、その下の判断分岐支援のところで考えていく。

**意見:** 支援者と当事者がミックスされて判断が決められていく、という形で話を聞いていたが、分析焦点者というのを両方にあててやっているの、色々なものがミックスしている、こういう場合どちらかに寄ったほうがまとめやすいのでは。

**意見:** 自分だけの判断と二人の合意で進めていくところをはっきりすれば(概念名をはっきりさせれば)、支援者にとってわかりやすいのでは。自己決定といいながら緊急避難的に支援者が決める場合もあるので、(はっきりさせれば)この図はわかりやすい。

**回答:** (図中の楕円や四角の質問に対して) 丸は必ず通る支援で、四角は必ずしも通らない支援のことを分けた方がわかりやすいと考え、形を変えた。

**意見:** 結果図は縦ではなくて、横のほうがよいのでは。縦は方向性を強く印象付ける。これはそうではなく、分岐が中心に来るので。小池さんが全体のプロセスをテーマにしていたのに対し、小松さんは当事者のニーズをテーマにしていた。それと支援者の関係にしぼって見ていけば判断と行動との関係が説明しやすくなる。色々な場面で一方向ではなく色々な動きが出てくるとのことなので、図は横のほうがよいのでは。

**研究方法に対する意見:** 問題関心が共有度が高いところの複数の人による調査で、そのときの生かし方はM-GTAでやるのであれば分析テーマを自覚的に相互に位置づける。それぞれが何を明らかにしようとしているのか、そこははっきりと説明できると思われる。どうした場合にこういうアプローチが適切なのかという問題もある。最初から個別にスタートしたほうがよいと思ったわけではなくて、それぞれの良さを生かす場合と、一緒にやるとそれぞれが消去してしまう場合もある。最初の報告を聞いたときに、これは3人が一緒にやってしまうと、公約数的な分析に移行してしまうって、細かいところを捕らえて説明するところには行きにくいと思った。一概にどっちがよいという問題ではないが、今回のような形で二つを合わせれば今までになかった結果が示せる。応用にもつながる。

今日の二つの結果を一つにまとめる方向と、もう一つはそれぞれの良さを生かす形で支援者に説明してフィードバックをとりながらまとめの形を考えていくというもある。二つをまとめてしまうと、今ある良さがどうなるのか。

### <感想>

初めて研究会に参加する立場でありながら、発表する機会を与えて頂きとても感謝しています。今回、いろんなご意見やご助言を頂いたことで、分析テーマと分析焦点者の重要性、わかりやすい概念名やしっかりした定義の生成など、押さえるべきポイントを確実に押さえていく必要があると分かりました。また、他の発表者の方の研究を知ることによって、考え方の幅が広がったように思います。今後は、就労支援を行う支援者が、支援を行う上でわかりやすく使いやすいと思ってもらえるような就労支援のプロセスを提示できるよう、努力していきたいと思っています。ありがとうございました。

### 【スーパーバイザー・コメント（研究報告1・研究報告2）】

山崎浩司（東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター上廣死生学講座）】

複数で共通した研究テーマについて共同でデータ収集を行ないながらも、異なる分析テーマを設定して各々個別に分析に取り組むというのは、これまでなかった試みのように思います。この意味でとてもユニークな取り組みで興味深かったです。ただ、【研究する人間】を重視する M-GTA においては、「なぜ共同研究なのか?」、また、「研究者間のスタンスや役割の違い(あるいは重なり)は、各自がどこまでどのように具体的に把握しているのか?」といった点について、全員がそれぞれ明確に説明できるようにしておかなければなりません。(そのためのメンバー間の分かち合いの積み重ねは、大変時間と労力がかかるものなのではないかと想像しますが、これは自分たちの研究テーマや分析テーマの明確化や、データ解釈の促進につながるはずですので、ぜひ避けずに取り組まれてください。)

SV では、小池さんと小松さんそれぞれが設定した分析テーマの違いをお尋ねしたところ、小池さんのものは「支援の関係性」に重点があり、小松さんのものは「支援の流れ」に重点があるとお答えくださいました。ですが、GTA では、対象現象のプロセスを説明する理論において同時にその構造を説明する(より厳密には、説明せざるを得ない)ので、両者を分ける必然性はありません。対象現象の構成要素をくまなく網羅した関係図(マップ)を作るのが 1 つの目的ならば、それには GTA プロパーではなく、その一部である継続比較法、あるいは KJ 法や質的内容分析といった分析法の活用を、考えるべきかもしれません。

ところで、これは決してお二人のケースに限ったことではないのですが、結果図が複雑すぎるように思うのです。GTA の目的は、複雑な現象を端的に理解できる統合理論を生み出すことです。現実の社会現象とは往々にして複雑なわけですが、それを圧縮(=reduction、グレイザーとストラウス自身の用語)し統合されたかたちで示すことが目指されます。複雑なディテールをもっとその

ままのかたちで結果に反映させたいのならば、エスノグラフィーやライフストーリーといった手法が活用されるべきでしょう。

また、これも結果図／理論にまつわることですが、現象のプロセスがたとえば  $A \rightarrow B$  と移行する場合と  $A \rightarrow C$  と移行する場合とでは、どのような条件的な違いがあるのかが、図示／説明できねばなりません。こうした条件的な違いがわからなければ、グラウンデッド・セオリーが目指す「人間行動の説明と予測を可能にする」ことにおいて、「予測」が正確に立てられません。それから結果図についてもう一点、カテゴリーや概念によって違うはずの重み（インパクト、説明力）を必要に応じて表現すると、プロセスにおける各部分の役割の違いが、結果図の中でもっと明確になるはずです。以上を意識されて全体像をとらえなおすと、理論／図全体に「うごき」がもっと出てくると思われます。

お二人が取り組まれている「精神障害者の就労支援」現象の解明は、とても社会的・学術的意義のある研究と感じますので、今後の発展と最終的な成果の結実が楽しみです。引き続き分析を展開し、有効性の高いグラウンデッド・セオリーを生成されてください。

### 研究報告3

発表者：坂本智代枝（大正大学 社会福祉学専攻）

発表演題：精神障害者のピアサポーターを支援するソーシャルワーカーの実践プロセス

#### 1. 研究テーマと目的

##### 【精神障害者のピアサポートの定義】

Solomon(2004)は、ピアサポートを 6 つのカテゴリーに①セルフヘルプ・グループ、②インターネットサポートグループ、③ピアによる生活支援サービス、④ピアが運営するサービス、⑤ピアパートナーシップ、⑥仕事に従事しているピアに分類している。つまり、当事者の支え合いの活動として広く捉えている。

一方日本では、田中(2002)によるオルタナティブサービスの分類の他、栄(2004)がピアヘルパーの概念を整理している。

「ピアヘルパーとは、精神疾患の体験を基盤に、特に、時間や場所を限定せず、ありのままの自分の力を生かしながら、精神障害者の日常生活における支援を行い、既存のホームヘルプサービスの不備な点を補完、検証、是正、改革する活動」(栄：2004)

以上の先行研究から、精神障害者のピアサポートは以下のように定義しておきたい。

「同じ問題や環境を体験した人が、対等な関係性の仲間として相互に支援を提供、受ける活動であり、多様(Solomon:2004 6 つのカテゴリーを含む)且つ柔軟で利便性のある地域生活支援システムのひとつである。」

精神障害者のピアサポーターを支援する専門職、(ここでは精神科ソーシャルワーカーとする)

の実践プロセスを実践のなかから仮説生成することを通して専門職の実践ガイドを提示することである。理念としてのパートナーシップ、協働を現場のソーシャルワーカーがどのようなプロセスで実践しているかを説明することによって、今後のピアサポート活動にかかわっている、進めて行こうとするソーシャルワーカーの実践のガイド(指針)になるのではないかと考える。子育て、高齢者等の保健、医療、福祉、教育の領域でピアサポートにかかわる専門職の実践ガイドにも貢献できるのではないかと考える。

## 2. 現象特性

現象特性とはソーシャルワークのヒューマンサービス分野の研究対象を横断する、純粋な「うごき」としての特性であるとして、動態的説明理論の重要な要素となっている。(木下 2007:217-222) 本研究の現象は、視覚障害をもつマラソンランナーとともに走る伴走者の役割の現象に似ているのではないかと考えた。ランナーも伴走者も同じゴールを目指す、ランナーのペース配分に一本のたすきの力加減によって対応する伴走者の力量が問われている。それは、ペースが速すぎて引っ張っても危険であるし、伴走者のペースが遅くなってもかえってランナーの力を阻害してしまう。ランナーと伴走者は対話しながら、ころよい速度を見出し歩調をあわせて走ることが必要になる。そのような「現象特性」があるのではないかと考える。

## 3. M-GTA に適した研究であるかどうか

M-GTA を採用した理由は、以下の4点である。①精神障害者のピアサポーターを支援するソーシャルワーカーという限定的な領域を対象としていることから、限定された範囲での分析に適した手法を採用する必要があること。②ソーシャルワーカーの実践は固定的なものではなくプロセス性をもっていて、人と人との相互作用と人と集団との相互作用があること。③ソーシャルワーカーがピアサポーターをどのように支援しているのか という仮説生成型の研究であること。④精神障害者のピアサポートの実践報告の近年の動向を踏まえると、実践現場に基づいたグラウンデッド・セオリーを導くことで、具体的なピアサポーターを支援するソーシャルワーカーの実践プロセスを提示する必要があると考えたことである。

## 4. 分析テーマの絞込み

分析テーマの絞込みは、「精神障害者の当事者主導化に向けたソーシャルワーカーの伴走的支援プロセス」とした。

## 5. データの収集方法と範囲

## 6. 分析焦点者の設定について

分析の視点として、研究協力者の背景や限定された範囲の集団を分析焦点者として設定する。本研究の分析焦点者を次のように設定した。地域生活支援活動において積極的にピアサポート活動を事業として展開し(刊行された雑誌等)に実践報告が掲載されている、ピアサポーターを支援している精神科ソーシャルワーカーである。さらに、精神障害者の地域生活支援活動に携わる5年以上の経験があり、且つピアサポーターを支援している精神科ソーシャルワーカーを分析焦点者とした。その理由は、ピアサポーターを支援しているソーシャルワーカーの実践プロセスを明らかにするためには、ソーシャルワークのミクロ・マクロ的な視点で実践している一定程度のベ

テランのソーシャルワーカーの実践から理論生成する必要があると考えたからである。

具体的な調査協力者は地域活動支援センターが3名、NPO 法人生活支援センターが2名、退院促進支援事業のコーディネーターが1名、通所授産施設が1名のソーシャルワーカーの計8名である。調査期間は2007年8月から2007年9月に実施した。(2008年2～5月にかけて8名の調査が済みおり合計16名である。後日2名追加予定である。分析中である。)データの取扱い、録音、逐語記録化、分析方法、研究報告、論文化等の趣旨を明記して文書と口頭で説明し承諾を得た。

A氏	地域活動支援センター	E氏	地域活動支援センター
B氏	地域活動支援センター	F氏	NPO 法人生活支援センター
C氏	地域活動支援センター	G氏	NPO 法人生活支援センター
D氏	通所授産施設	H氏	退院促進支援事業 コーディネーター

7. 分析ワークシート 別紙①参照

8. カテゴリー生成 別紙②参照

9. 結果図 別紙③参照

10. ストーリーライン 別紙④参照

#### 11. 方法論的限定の確認

本研究の調査対象者の特徴は、地域生活支援活動に係わるソーシャルワーカーであることと、ピアサポーターを支援することは精神障害者の地域生活支援活動の一つの業務として位置づけ実践している者であった。したがって、地域性や事業の概要によって業務内容に相違はある。しかし、ピアサポーターと関係を築くことに対して、揺れ動き迷いながら模索している現象は共通していた。

#### 12. 論文執筆前の自己確認

##### ① 本研究の社会的意義

近年、「ピアカウンセリング」、「ピアヘルパー」、「ピアサポート」、「ピアサポーター」等のピア(仲間)の力を活かした当事者が「支援者」として地域生活支援を担う実践活動が多様且つ多く報告されるようになってきた。(寺谷 2006; 行實 2006a,2006b; 松田 2006; 山口弘幸 2006a,2006b; 山口弘幸,山口弘美 2002; 加藤 2006; 金山 2004; 奥村 2005; 香木 2004,2005; 中城 2004,2005; 栄 2004; 西脇 2003; 原 2003; 青木 2007)その背景には、地域生活支援システムの要素として積極的にピアサポートを精神保健福祉サービスとして統合していこうという動きがあると考えられる。しかし、精神障害者のピアサポートの活動は多様で概念が明確に整理されていないことと、ピアサポートの有効性の一方でピアサポートに係る当事者(ピアサポーター)が置かれている環境の未整備により様々な葛藤を抱えていることもわかった(Mowbray/Mokley1996,1997,坂本 2007a)。

精神障害者のピアサポートの多様な実践の先行研究(坂本 2007a,b,2008a,b)よれば、ピアサポート活動には、スーパービジョンやコーディネーター等ピアサポーターを支援するソーシャルワーカーの存在が背景にあることが明らかになった。しかし、そこではどのような実践が行われている

のかは明らかにはされていない。そこには、ソーシャルワーカーと当事者であるピアサポーター等の社会的相互作用が存在している。その「うごき」の現象を明らかにすることは、今後のピアサポートの実践やピアサポーターを支援するソーシャルワーカーの実践に役に立つエビデンスが生成できるのではないかと考えている。

## ②本研究の学術的意義

「ピアサポートと専門職の関係」についての研究では、Solomon.P(1998) (=2002 野中猛監訳『チームを育てる』金剛出版 2,pp98-116)が、「当事者スタッフの役割の明確化」、「当事者の雇用に向けた組織的な準備」、「当事者スタッフの組織に対する効果」について提案している。最近では、Lauren B.Gates, Sheila H.Akabas (2007)は「当事者が精神保健福祉機関に統合されるうえで特別な問題」として、①当事者ではないスタッフの中でのリカヴァリへの態度、②役割の葛藤と複雑さ、③秘密保持の問題、④当事者の仕事に対する価値の認識の低さ、⑤ネットワークとサポートの機会の欠如を挙げている。その枠組みをもとに、質的分析を行い「戦略的な設計」として①機関が当事者を雇用するためにどのような準備がしているのかについて評価すること、②すべてのスタッフとクライアントに当事者スタッフの役割とサービスに当事者が貢献するという信念と実践を明確に理解すること、③当事者の配属のために募集のプロセスと仕事の構造を形式化すること、④スタッフの役割を明らかにすること、⑤ピアを統合化することを最大に評価するためにピアスタッフに対して継続したサポートを提供することを整理している。

以上欧米における精神障害者のピアサポートに関する研究を概観してきたが、ピアサポートの有効性や課題については、検討されているもののピアサポートを精神保健福祉機関に統合するための専門職等の役割に関する研究は始まったばかりである。

現在日本でも退院促進支援事業や地域活動支援センター等の地域生活支援活動において、当事者が「支援者」として働いていることも増えてきた。しかし、試行的な要素も強く、財政的、法制度上の保証も何もない現状である。ピアサポートの有効性を担保し且つピアサポート活動の実践が広がるためにも、ピアサポーターを支援する専門職の役割を検討する必要がある。

(引用文献は省略)

## <質疑応答・SV コメント>

先行研究において精神障害者のピアサポーターが様々な葛藤を持っているということが述べられていたが、具体的にはどのようなことか。

→精神障害者のピアサポートの有効性の一方で、当事者が「支援者」としての役割をもつことは「役割の複雑さ」、専門職よりも低い位置づけとしての「second class worker」、「役割の重圧と役割葛藤」、「支援者と仲間のバウンダリーの問題」を抱えることが示されている。Lauren B.Gates, Sheila H.Akabas (2007)は「当事者が精神保健福祉機関に統合されるうえで特別な問題」として、①当事者ではないスタッフの中でのリカヴァリへの態度、②役割の葛藤と複雑さ、③秘密保持の問題、④当事者の仕事に対する価値の認識の低さ、⑤ネットワークとサポートの機会の欠如を挙げている。

幅の広い緩やかな精神障害者のピアサポートについて、調査研究の前に「精神障害者のピア

サポート」を定義することは、データに密着した理論生成が困難になるのではないか。

→分析後の考察の時に整理するほうがよいのではないか。

分析テーマはこれでよいのか

→「伴走的支援」とはあたりまえではないか。「オリジナリティ」と「うごき」のあるプロセスを説明できる分析テーマにする必要があるのではないか。

全体図の中で「コア概念」になっている＜主導化を防ぐための点検作業＞の詳細な内容について丁寧分析するとおもしろい概念を作ることができるのではないか。

→さらに、詳細に概念化する必要がある。

分析結果の「オリジナリティ」と「新しい知見」について、

→従来のソーシャルワークにおける支援と比較してどこに新しい知見があるのか。

従来の「クライアントを支援するプロセス」と「ピアサポーターを支援するプロセス」は、異なるものなのかあるいは延長線上にあるものなのか、明確な「オリジナリティ」と「新しい知見」と言えるものが説明できるとおもしろい。

#### ＜発表の機会を得て＞

今回の発表の機会を得て、データに密着しているつもりでも、どこか今まで培ってきた「規範」に当てはめようとしていることに気づかされました。今回のスーパービジョンの機会に投げかけられた多くの検討点を踏まえて、再度分析を進めております。質的研究は「研究する人間」が基本となりますが、「研究する人間」が基本となるからこそ、研究会での発表等によるスーパービジョンが必要ではないかと思えます。貴重な機会を得られてたいへん感謝しております。ありがとうございました。

#### 【スーパーバイザー・コメント

佐川佳南枝(立教大学)】

ピアサポーターの支援という、これからソーシャルワークの分野でも重要になってくるであろう分野の実践的ガイドとして意義のある研究だと思いました。現象特性として視覚障害のあるマラソンランナーの伴走者として例えられたこともよく理解できると思いました。ただそれを始めから分析テーマの中で言っちゃったほうがいいのか。熟練したソーシャルワーカーの支援プロセスを見ていたら結果的に伴走者のように支援していたということがわかったとしたほうがいいのか、始めからそのような特徴があるものとして分析の展開を見せたほうがいいのか悩むところです。

また、ピアサポーターのサポートということで、動きの二重性がある、つまり、概念にしてもソーシャルワーカー自身の動きとピアサポーターの動きに対するソーシャルワーカーの動きの二つがあり、複雑性が増しているという難しさがあると思います。なので概念もソーシャルワーカー自身についてのものとピアサポーターに対するソーシャルワーカーについてのものがある。そのためそれを区別するために「当事者の不安定な役割遂行の調整」とか「当事者としての役割の意識化」などいちいち「当事者の」とかをつけているために概念名が説明的で長くなってしまっていますね。この

へん、なんとか工夫の余地はないでしょうか。例えば「当事者に任せることへの葛藤」とかは単に「任せることへの葛藤」で通じると思いますが。またカテゴリー名を「当事者の役割進化サイクル」などとくくってあれば、その中の概念はすでに当事者に対するSWのリアクションだとわかるかと思います。

ところで「主導化」を避けて「伴走支援に徹する」ということが強調されるわけですが、よりそって支援するからには「ヤバイ」と思われるときがあるのではないですか？そのようなときにはSWはどうしているのでしょうか？危機状況への介入のようなことは、データの中では出てこなかったのでしょうか？…ということをふと疑問に思いました。

#### 研究報告4

発表者:河先俊子(フェリス女学院大学 留学生センター)

発表演題:韓国人日本語教師の日本人との関係構築に関する研究

##### 1. 研究目的

韓国と日本の間には越えられない「溝」として歴史認識問題が存在し、良い関係の構築を妨げていると言われている。しかしながら、韓国は世界で最も日本語学習者が多い国であり、国交正常化以前から日本に留学生を送り出している。韓国からの留学生は、韓国文化を携えて来日し、日本人と交流しながら日本語を媒介として様々な知識を得、その経験や知識を帰国後自国内で伝えるという点で、日本と韓国のいわゆる人的、知的交流の担い手になっていると言える。中でも特に、帰国後、日本語・日本学の専門家として大学教育に携わっている人々（以下韓国人日本語教師と呼ぶ）は、日韓の人的、知的交流において重要な役割を果たしているといえる。また、彼らは、人生の大半を日本と関わり続けているという点で、独特の日本観、日本人観、日韓関係観を持つようになっていると考えられ、それらは、教育活動に少なからずにじみ出ていると考えられる。彼らは、日本人とどのように交流し、どのような関係を築いているのだろうか。その経験は、帰国後の教育活動にどのように波及しているのだろうか。そこに歴史認識の問題、つまり加害の歴史を認めない日本と謝罪を求める韓国という構造が立ち表れるのだろうか。

上記のような問題関心から、本研究では、日本に留学経験がある韓国人日本語教師を対象とし、彼らが日本語学習を始めてから現在までの日本人との関係構築のプロセスに焦点を当て、それがどのようなものであるか、そこに歴史認識の問題がどのように立ち現れるかを明らかにすることを目的とする。

##### 2. 現象特性

韓国人日本語教師は、歴史認識という民族意識の根源にも関わる問題に起因する日韓両国の対立という文脈の中で、日本語及びその向こう側にいる日本人と関わり続けている。



### 3. M-GTAに適した研究であるかどうか

- ① 本研究が注目しているのは、韓国人日本語教師が日本人とどのようにしてどのような関係を構築してきたかということであり、プロセス性を持っている。
- ② 日本語教育の領域では、「日本語」の習得だけではなく、母語話者と非母語話者が「日本語」によって関係を築き共に生きる社会を作ることも課題となっている。本研究で韓国人の側から見た日本人との関係について一つのモデルが提示できれば、韓国人に対する日本語教育のあり方について日本人の側から考える上で有用であると考えられる。

### 4. 分析テーマへの絞込み

韓国人日本語教師の日本人との関係構築活動：韓国人日本語教師は日本語学習開始後から現在まで日本人とどのように関係を構築してきたか

### 5. データの収集法と範囲

2007年5月と2007年8月、本研究の主旨を説明して協力の承諾を得られた15名の韓国人日本語教師に対し半構造化面接を行った。インタビューは私が対象者の勤務先の大学を訪問して実施した。使用言語は日本語で、所要時間は1時間半から2時間程度である。対象者は、1980年以降2007年までの間に日本に留学し、現在韓国の大学の日本語・日本関連学科で教鞭を取っている先生方である。調査時点での年齢は30代前半から50代半ば、在日期間は5年から14年である。インタビューでは、日本語学習開始時から現在までの日本語に関わり続ける動機や、日韓関係の諸問題に対する考え、日本人との交流経験などについて広く回想的に語ってもらい、日本語・日本関連学科の教員としてどのような学生を育てたいかという点についても尋ねた。

### 6. 分析焦点者の設定

インタビューした15名のうち、日本人と満足できる関係が築けたと自らが判断した方10名。他の5名は留学中、日本人と満足できる関係が構築できなかったと語った。日本人と満足できる関係が構築できた方に対象者は絞った理由は以下の通りである。

- ① 日本人との関係についての語りが具体的で豊富であること
- ② 日本人の友人ができなかった群と比較が可能であること

### 7. 分析ワークシート、結果図、ストーリーラインは別資料で提示した

### 8. カテゴリー生成：32個の概念を生成し、12個のカテゴリーとした

### 9. 方法論的限定の確認

- ① 分析に用いたデータは、日本留学経験のある韓国人日本語教師のうち、日本人と満足できる関係が構築できたと認識している 10 名のものに限定した。
- ② 30 代から 50 代までと幅広い年齢層の対象者に回想法によってインタビューをしているため、語りの内容に年齢効果が表れている可能性がある。また、インタビューを行った 2007 年は日韓間で大衆文化の流出入が活発化しており、それ以前とは違った様相を示している。このような時代背景が語りの内容に影響を及ぼしていることも考えられる。従って、データは現在という文脈で現在の自分から見た日本人との関係構築の実態という限定付で解釈する必要がある。
- ③ また、年齢の差異に伴って韓国で大学に入学した時期も 1977 年から 1994 年と幅広いが、この間韓国は激しい民衆運動を経て、民主化を果たしており、青年期の自国での教育体験が異なっている。さらに、韓国では男性に兵役が課されており、男性と女性では国家に対する意識も異なっていると考えられる。また、対象者の中には両親や親戚が日本生まれという方も含まれており、それは留学前の日本イメージに影響を与えている。つまり、諸条件による差異も検討しなければならないと考えられるが、今回は、日本人との関係に関する語りの共通点に注目して分析した。
- ④ インタビュアーが日本人であるため、対象者である韓国人は、インタビュアーにとって好ましい内容を語る可能性があると考えられる。インタビューでは、事前にインタビュアーの現在の立場や研究の目的を十分に説明するなどバイアスがかかるのを防ぐ努力をした。しかし、それでも依然として上記のような限界は残ることは否めない。

## 10. 論文執筆前の自己確認

- ① この研究で明らかにしようとしていること  
韓国人日本語教師の日本語学習開始から現在までの日本人との関係構築活動の全体像。加えて、その中に歴史認識問題がどのように表れるか。
- ② 明らかになったこと
  - ・ 韓国人日本語教師は特に留学中は関係構築の主たるアクターとして、自己主張、自文化の主張を行い、日本人がそれを承認するという相互作用、あるいは日本人からの積極的な働きかけを受けることによって、満足できる関係を構築している。帰国後は、自らの経験と日本人認識に基づき、自国民に対して日本人理解を促進させ、日本に対して客観的な態度を育成するなど日本人との交流、あるいはそれを通じた日韓関係改善を標榜する教育活動を行い、間接的に日本人との関係構築活動に関るようになっていく。
  - ・ 歴史認識問題は、満足できる関係の中で日本人の側から表明されるか、韓国人の側から主張するかによって両者の間で共通の認識に至り、個人間では解消されている場合も多い。しかし、主張が拒否されたり、受け入れがたい歴史認識を示す日本人が存在することも認知されており、その場合、個人間で話題にすることが避けられ

るため、問題化しない。

- ・ 個人間の関係において歴史認識問題は決定的に重要な問題にはならない。個人間の関係と国家間関係とが結びつけられるのはむしろ帰国後であり、主として韓国人の客観的な日本観を育てることで関係改善に働きかけることが目指されている。しかし、その一方で日本人側の意識変化や国家レベルでの解決も求められており、ここに実現の難しさが見える。

### ③ 明らかになったプロセス

韓国人日本語教師が留学後今まで直接的、間接的に日本人との関係構築に関っているが、自らがアクターとなった直接的な関係構築活動が、教員としての間接的な関係構築活動に影響を与えている。また関係構築活動に日本人の韓国理解の態度が影響を与えている。

### ④ 研究の意義

韓国人側から見た日本人との関係に注目することにより、日本人側からの働きかけの重要性が明らかになったこと

### ⑤ 韓国人に対する日本語教育についてどのような視点が得られたか

日本人の側の歴史認識も含めた韓国文化の理解と尊重、及び一個人として対等な対応が関係構築において重要である→交流プログラムなどを考える場合、一方的に日本を紹介するようなプログラムではなく、差異の理解に重点を置くようなものが望ましいかもしれない

### ⑥ 研究の限界、問題点

- ・ 全体像を大まかに捉えているため、各カテゴリーがそれぞれプロセス性を含んでいるが、それについて細かい分析できなかった
- ・ 時代背景の効果が分析できていない
- ・ 留学中の語りの中で韓国人の代表として自己が認識されている場合と、一個人として認識されている場合とがある。どのようなアイデンティティを持っているかということも関係構築の重要な要素となると考えられるが、理論化できなかった

### SV 及びフロアからのコメント

(1) 現象特性について：一般化された抽象的な表現になる。現在のものは具体的過ぎる

(2) 分析テーマへの絞込みについて

・「関係構築活動」としてあるが、どういう行動をしたかだけではプロセスではなく、分類になる

・ 相対する民族のことばに関り続けている分析焦点者の個人としての経験を理解することが重要なのではないか。韓国で日本語を教えているということはどのような経験なのか。分析焦点者の中で折り合いがついていたりいなかったりするのではないか。

・ 現在の分析テーマはどういう結果にもなりそうなものである。データのユニークさを生

かすような分析テーマにした方がいいのではないか。人間関係に着目している現在の分析テーマを離れた方がいいのではないか

(3) 概念について :

- ・ 概念は分析焦点者から見た内容、表現にすべき
- ・ 分析焦点者の世界を的確に現すような表現にした方がいい

(4) 結果図について :

- ・ ありきたり、平板な印象である

次のステップ

「日本人との関係構築に注目する」ということに固執していましたが、いったんそれを離れ「どのように日本語とかかわりを肯定化しているか」に着目してもう一度分析をしてみたいと思います。

#### 【スーパーバイザー・コメント

小倉啓子(ヤマザキ動物看護短大)】

「韓国日本人教師と日本人との関係構築活動:韓国日本人教師は日本語学習開始後から現在まで日本人とどのように関係を構築してきたか」が分析テーマである。データの分析を終わり、結果図も作成したところまで進んでいた。今回、河先さんが希望される研究会での検討事項は、① M-GTA を適切に使っているか、② このテーマは、医療・介護・看護の領域と異なるが、M-GTA に適しているか、であった。

フロアからのコメントが少なかったのが残念であったが、次の点を SV が質問し、コメントした。

①この分析テーマであると、何でもある式になり、データの分類・整理になる危険もあるのではないか。関係の変化をもたらす‘動き’をもっと意識した分析テーマの設定が必要である。

②分析テーマでは「どのように関係を構築」とある。「どのように」ということからプロセスを意識していることはわかる。しかし、「どのように」の前に、どのような関係の変化があったのかを捉える必要があると思う。出発点の関係性 A から B や C へという関係性の質の変化である。次に、その変化が「どのような動き」で起きたのか、ということになる。

③満足にゆく関係構築のケースを取り上げる、としながらも、関係構築が不満だったプロセスを説明する概念も多かった。現実には、プラス・マイナス経験が同時並行して相互作用は進むが、両方のプロセスが同時に取り上げると概念も多く、プロセスも複雑に絡み合うことになる。論文のサイズは、投稿論文ではなく博論とのことで、紙幅の点では問題がないようであった。博論であれば、本研究の位置づけを考え、分析テーマも検討する必要があるのではないか。

④概念名と定義を出来るだけ一致させる。定義の一部だけを表現した概念名は再検討が必要と思う。

木下先生からコメント

分析テーマの設定が課題である。博論は、どのあたりまで出来ているのか。対象者と自国民、対象者と日本人との関わりで大きく異なるのは何か。

#### ◇ 近況報告:私の研究

M-GTA 勉強会を中心とした「質的研究同好会」

塚原節子(岐阜大学医学部看護学科)

M-GTA 研究会の皆様こんにちは。

私は、昨年度富山大学から岐阜大学に変わって来ました。富山大学在職中には、何度か木下先生をお招きして、ご講義を頂きました。そしてM-GTAの分析手法を見よう見まねで使って、大学院修士論文の指導に当たってきました。実は自分の博士論文はいつこうに進まないのですが……

富山には、M-GTAの分析手法に興味を持って、その手法を使って看護研究に取り組んでいる看護師や大学生、大学院生がずいぶん多くいます。そこで私は一昨年10月に富山で、M-GTA分析手法の勉強を中心とした「質的研究同好会」を立ち上げました。毎月第2週目の土曜日に「質的研究同好会」を開催しています。メンバーは20人ほどですが、今までに木下先生のご指導を受け、修士論文を書き上げた人を仲間に引き込み、そのメンバーが中心となって会を運営しています。私は東京でおこなわれているM-GTA研究会で学んだことを「質的研究同好会」メンバーに伝達しています。また、木下先生はじめ、水戸先生や小倉先生の著書を教科書として、「M-GTA分析手法を活用して研究を進めたい」という看護師さんたちが持ち寄った研究計画書に、「あーでもない、こーでもない」と意見を戦わせています。そこでいつもつまづくのはやはり分析テーマの絞り込みです。何を明らかにしたいのかが明確でない状態で分析を進めていくと、プロセス全体が散漫になり結果として何を明らかにしたかったのかさえわからなくなってしまうことがありました。M-GTA研究会に出席させていただいて、どれだけ分析テーマの絞り込みが大切かを十分理解していたはずなのに……つまり、分析テーマの絞り込み自体がどんなに難しいことかということを、ようやく今になって理解した次第です。

自分の博士論文も遅々として進まない状況ですが、「質的研究同好会」でのディスカッションは、自分自身がM-GTAの理解を深めることと、今後の自分の研究の分析過程にきっと役立つと信じています。

今度は是非富山で合宿を開催していただきたいと思っております。立山の大自然に抱かれ、そこから流れるおいしい水とおいしい空気。勉強会の後は黒四ダムから流れる黒部川溪流の秘境にトロッコ電車を出かけてみるというのはいかがでしょうか？

.....

市江和子(聖隷クリストファー大学)

私は、このたび、「重症心身障害児施設に勤務する看護師の重症心身障害児・者の反応を理解し意思疎通が可能となるプロセス」を論文としてまとめ、学会誌に掲載することができました。これまでの、研究会での皆様のご支援を深く感謝しております。掲載誌が届いたときは、じっと本を手にして、いくばくかの時間を過ごしました。

M-GTA 研究会には、「重症心身障害児(者)の行動への看護師の関わりと反応理解のプロセス」として、構想発表させていただきました(2004年12月11日(土):Newsletter no.7)。次いで、「重症心身障害児施設に勤務する看護師の援助に対する認識の形成プロセス」を発表いたしました(2006年5月27日(土):Newsletter no.13)。構想発表から2年を経過して研究発表、論文にするまでに約3年をかけました。途中で、まとめることができるのだろうか、これでよいだろうかという点を、ずっと不安に思いながら取り組んだのが実情です。

しかし、研究の全過程において、自分が明らかにしたいプロセスとは何かをずっと問い続けました。そして、このテーマが、自分の明確にしたいことだったので、「障害児・者との関わりを通して、相手を理解していく過程。対象とした看護師の行動の変化に焦点を当てる」ことを念頭においてデータに向かいました。質疑・応答では、分析テーマは何か、概念、カテゴリー名の表現がラベル名を表していない、などを受けました。また、論文のオリジナルな点は何かを問われた時、看護職の障害児・者への援助認識について明らかにした論文はみあたらないため、そこがオリジナルな点と考えることを説明させていただきました。しかし、2回の発表で、分析にそのデータが表現されていない、思いこみなど、多くの点を気づき学ぶことができました。また、質的研究の中でもM-GTAを選ぶことで、対象の現象のプロセスや相互作用を明らかにできたと振り返っています。

これからも、メンバーの皆様とともに、研究の研鑽を積み重ねたいと思っています。今後ともよろしく願いいたします。

.....

山元公美子(山口大学大学院医学系研究科保健学専攻 博士課程前期)

M-GTA 研究会に入会して約半年となります。質的研究に興味があるものの具体的な研究の進め方については知識も乏しく、自分の研究の進め方にも悩んでいるときに、この研究会に出会うことができました。初めて研究会に参加させて頂いたときには、1つ1つの研究に対してものすごく丁寧にクリティークやアドバイスをされていて、非常に有意義な研究会であることを実感致しました。

私は母性看護学を専門分野としており、現在では、若年妊婦さんを対象とした心理・社会的ケアに関する研究を行っています。10代の女性が妊娠された場合、自分自身が成長発達過程にある上に胎児発育という両方のニーズを満たさなければならず、様々な葛藤をするといわれています。出産を決意し妊娠経過を過ごすと同時に、どのような葛藤があり、日常生活をどのように変容させてきたのかを明らかにしたいと思い、若年の妊婦さん達に寄り添ってお話をお伺いしているところ

です。

実際に研究を進めていく上で、「本当にこのリサーチクエストでよいのだろうか?」「これは M-GTA に沿った研究であろうか?」と悩むことが多々あります。研究会に参加した際にもこの点はよく確認されますが、実際にデータと向き合ってみると、見えてきたり逆に分からなくなってくることがあります。私自身がまだ質的研究の超初心者であり、初歩的な部分から勉強を積み重ねているような状況ではありますが、M-GTA の本を読んだり、研究会に参加して研究発表や構想発表をお聞きすることで、少しずつ解決のヒントを得られてきているような気が致します。

私の研究はまだデータ収集がはじまったばかりで、研究会で構想発表ができる段階までにはまわっておりませんが、また少し先の研究会でスーパーバイズを頂けるよう、努力して進めていきたいと考えております。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

## ◇連載・コラム

### 『死のアウェアネス理論』を読む（第 5 回）

山崎<sup>ひろし</sup>浩司（東京大学）

#### 1. はじめに

今回は番外編として、ストラウスの紹介を試みた。決して網羅的ではなかったかもしれないが、単に GTA の考案者という一面に限定されない、ストラウスの多様な側面を少しは読者に提示できたのではないかなと思う。いかがだっただろうか。

さて今回は、『死のアウェアネス理論』の内容に戻り、第 1 章「終末認識の問題」を読んでゆきたいと思う。（予定では第 2 章も読むつもりだったが、こちらは次回にまわす。ご了承ください。）注目するのは、グラウンデッド・セオリーの位置づけ、コア・カテゴリーとコンパクトさ、の 2 点である。

#### 2. グラウンデッド・セオリーの位置づけ

木下先生が『グラウンデッド・セオリー・アプローチ』（木下, 1998）の第 1 章第 2 節「初期研究の社会学的考察」（p.36-40）で書かれておられるように、『死のアウェアネス理論』の構成は、第 1 部の 2 つの章と最後の章（第 15 章「認識と社会的相互作用の研究」）が、病院で死にゆく患者と彼をとり巻く人びととの相互作用の過程を体系的に著した記述を、挟むかたちになっている。この 3 つの章は、グレイザーとストラウスが生成した「認識文脈（あるいは、より限定的に「終末認識文脈」）」というグラウンデッド・セオリーが、社

会学の理論的潮流のうちに位置づけられるものであることを、再三再四説明したものである。端的に言えば、認識文脈理論の学問的位置づけを明示しようと試みている部分である。

では、社会学者以外はこの3つの章に興味深く読めないかという、そんなことはない。確かに第15章はかなり議論が社会学的な内容に限定されているが、今回注目する第1章および次回検討する第2章については、彼らが生成した理論またはそれを生み出すことになった調査研究の社会的意義が多分に記されており、それらは終末期医療の現場に携わる者や病院で死にゆくことにまつわる問題に関心をもつ誰にとっても、十分に読み応えがあるものである。

第1回のコラムで論じたように、グレイザーとストラウスがこの研究を実施した1960年代のアメリカでは、ゴーラーやアリエスのいう死のタブー視の風潮は根強かった。したがって、当時の医学・看護教育において終末期医療にまつわる訓練といえば、「主として患者ケアの技術的な側面における対応」に限定されており、基本的に『『心理的側面』がその訓練に含まれることはなかった』し、臨床現場である「病院においても、死にゆく患者を適切に管理する方法は純粋に医療・看護の技術的側面に限定される傾向」にあった（4頁）。こうした状況に一石を投じることが、終末認識文脈という理論を生み出すことになった本研究に、グレイザーとストラウスが取り組んだひとつの理由であったことが、ここでは明示されている。

また、第1章では、研究にとりかかった背景だけでなく、研究結果を先取りするかたちでその一部を示したうえで、自分たちの視座（あるいは、立ち位置）を提示している――

当事者である医師や看護婦[ママ]の間で認められている終末期患者への最も標準的対処方法は、次のようなものである。つまり、迫りくる死をまだ知らないの、そのことについて質問してきそうな患者や、迫りくる死を「受容」できずにいる患者、また激しい苦痛のなかで終末を迎える患者との接触を避けようとするのである。しかし、本書が論証するように、終末へのこうした対処方法は、患者の社会的・心理的ケアにとっても、またスタッフ自身のストレス軽減のためにも、逆効果をもたらす場合がはるかに多い。（7頁）

これはつまり、終末期を告知しない状況は、患者と医療者（そして書かれていないが家族を含むあらゆる相互作用者）にとってよくないもので、打破すべきものという視座である。こうした価値判断を結果から導き出すことの妥当性は、この判断を無効にするような例外事例・対極事例が見当たらない、または論理的に反駁する余地がないことなどが認められて、はじめて成立するものだろう。したがって、この点は第3章以降を読んでゆくなかで確認してゆく必要がある。

ところで、研究課題設定の背景と研究者の視座に加えて、本研究の具体的な焦点についても第1章では述べられている――

1. 死にゆく患者と病院のスタッフの相互作用のなかで、反復頻度の高いものは何か。
2. 終末期患者に接するときにスタッフが活用する戦術にはどんな種類があるか。



3. こうした相互作用や戦術は病院組織のどのような条件下で起きるのか。
4. また、これらは患者、家族、スタッフ、病院自体、つまり死にゆく状況に関わるすべての人や物にいかなる影響を及ぼすのか。(8 頁、波下線は引用者)

この 4 点には、第 3 回のコラムで論じた「分析視角」の要素が含まれている。つまり、グレイザーとストラウスが中心的に注目しているのは、「相互作用」、「戦術」、「病院組織」、「条件」、「影響（帰結）」である。ここで留意すべきは、「相互作用（または社会的相互作用）」というとき、われわれは往々にして人と人とのやり取りばかりに注目しがちであるが、人同士のやり取りには必ず「場」というものがあるという事実だ。「誰と」だけでなく、「どこで」も、相互作用を考える際には考慮し忘れてはならない。病院で看取るのか家で看取るのか、あるいは、病院で看取るにしても一般病棟でなのか、ホスピス病棟でなのか……。こうした条件の違いで、患者・医療者・家族の相互作用が——つまり実践されるケアの質が——変わってくる。

医療社会学的に言えば、こうした研究はケア論（ケアのバリエーションと編成のメカニズムの解明）であり、より大きな社会学の枠組みで言えば、仕事・労働（編成）論に位置づけられる。そして、社会学の理論的潮流にこの研究を位置づけるとすれば、それは間違いなく相互作用論である——

私たちは本書において、「社会的相互作用」をいかに概念化するか、そしてそれをいかに説明するかという問題に取り組む……社会学の巨匠たちは皆この問題に取り組んだのである。調査を行なう研究者もまた、集団、組織、制度内で生ずる相互作用をいかに特徴づけ、いかに説明するかを決めなくてはならない場合が多い。(9 頁)

ということで、これは社会学的な研究なのだから、最終的な知見であるグラウンデッド・セオリーは、社会学者さえ理解できればそれでよい……のだろうか。グレイザーとストラウスによれば、それは違うという——

社会学者は観察した事柄を、彼の解釈が現場の人々にとっても正しいと思われ、同時に、彼らにとって自分達でしたくてもできない方法で報告するときに、最大の貢献をなす。言い換えると、真に有益な社会学的報告とは、現場の人間から見て十分内情をとらえていると思われるが、ただ単に彼らの既知の事柄だけを伝えているのではない報告のことである。そのうえ、現場の人々はすべてのことについていつも皆同じ見方をしているわけではなく——とくにストレス度の高い状況ではそうである——社会学的説明はこの点も考慮に入れなくてはならない。社会学者の責務は、正直に、しかし彼独自の視点から報告することである。(8-9 頁)

研究分野やアプローチによって、とりくむ研究の学術的意義と社会的意義のウェイトは変わってくる。そして、近年は学術的意義ばかりで社会的意義のあまりない研究に対する風当たりは強い。(このことは、必ずしも良いこととは言いきれないが……) GTA はその創成期から、高い学術的意義に劣らない高い社会的意義を兼ね備えた知見を生み出すように、

方向づけられていたといえる。こうした実践的なグラウンデッド・セオリーの位置づけの背景には、前回のコラムでみたように、おそらくストラウスが継承したシカゴ学派社会学のプラグマティズムがあるのだろう。

### 3. コア・カテゴリーとコンパクトさ

さて、話をコア・カテゴリーに移そう。コア・カテゴリーとは、「最も説明力をもった中核となるカテゴリー」（グレイザー・ストラウス, 1996: 97）のことであり、いわば対象現象の説明図式の屋台骨にあたる。（私は、生成するグラウンデッド・セオリーをタペストリー〔織物〕のようなものとイメージする場合、「縦糸」という表現を使っている。）『死のアウエアネス理論』におけるコア・カテゴリーはいくつかあるが、コア中のコアであるカテゴリーは、当然「認識文脈」である。その定義が、第1章に明確に示されている――

「認識文脈」と呼ぶ概念は、相互作用に關与する 1 人ひとりが患者の医学的病状判定 (defined status) について何を知っているか、そして彼が知っていることを他の人はどこまで知っていると彼自身思っているのか、ということの意味する。……「認識文脈」は患者の病状判定を知りつつ、こうした人々が相互作用を行なう文脈を指す。(9-10 頁)

この「文脈」の種類として、第1章で端的に（第1回目のコラムで既に示した）〈閉鎖〉認識、〈疑念〉認識、〈相互虚偽〉認識、〈オープン〉認識の4文脈が挙げられている。さらに、これら4つの「うごき」のある関係性が、次のようなかたちで説明されている――

認識文脈の各々のタイプが患者とスタッフのやり取りに与える影響は深遠である。なぜなら、だれが何を、どれくらいの確かさで知っているかに応じて、人は話す内容や行為を変えるからである。話、行為、そしてそれらに付随して開示されるさまざまな手掛りが明らかになるにつれて、ある認識文脈が他の認識文脈へと変化する。言い換えると、相互作用は変化し、発展し、決して静止状態にとどまらない<sup>1</sup>。(10-11 頁)

これは、「認識文脈」というコア・カテゴリーを枠組とした対象現象全体のプロセスの力学特性を、相互作用の観点から説明したものである。つまり、コア・カテゴリーを中心にわれわれが明らかにしようとする対象現象の「プロセス」とは、いわばそこに見られる変化を生み出す力学的な構造を意味する、といってもよい。コア・カテゴリーは、そうした構造を説明する枠組であり原動力である。少なくとも私はそうしたイメージでコア・カテゴリーをとらえている。

したがって、原動力が明確でない説明図式（グラウンデッド・セオリー）では、当然「プロセス」を描出することはできないことになる。こうした論理に基づいて、私はコア・カテゴリーの生成にこだわっており、木下先生が『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』（2003）第17章第2節で示されている（理想的にはあった方がよいが）「コア・カテゴリーがなくてもよい」（213-215 頁）という見方よりも、厳しい見方をとっている。

私見では、研究の企画段階から【研究する人間】として、研究テーマ、分析テーマ、そして現象特性をくり返し吟味することで、研究過程の比較的早い段階で原動力（の少なくともおぼろげな輪郭）が見えてくるように思う。この吟味は、具体的には研究ノート（と私がよんでいるもので、要するに研究日誌のようなもの。分析ワークシートの活用が始まると、「理論的メモ・ノート」の役割も果たす）をフル活用し、研究の最初から継続的にノートに思いつくことをメモしてはそれを読み返し、またメモしてはまたそれを読み返し、また……と、とにかく継続かつ集中的に思考をぶん回すことで可能になる<sup>2</sup>。

コア・カテゴリーを、生成するグラウンデッド・セオリーの中心に据えることに私がこだわるもう 1 つの理由は、コア・カテゴリーのもつ求心力／構成力が、理論をコンパクトなものにすると考えているからである。生成されるグラウンデッド・セオリーは、コンパクトでなくてはならない。グレイザーとストラウスも、木下先生も再三強調されているように、GTA で生成される統合理論は、当該現象が起きている現場（またはそれに類する現場）の応用者によって活用されることでその説明力が試され、さらに必要な修正が加えられるべきものである。であるならば、まずもって、その理論は現場で思い出せるくらいコンパクトでなければならない。思い出せないほど複雑な理論は、いくらインパクトがあっても、当然現場で活用できるはずもない<sup>3</sup>。

コア・カテゴリーを中心に少数のカテゴリーが関連づけられた統合理論は、複雑さを回避しつつも、十分に現象の力学的構造のエッセンスを読者に伝えられるはずである。誤解を恐れずにいえば、研究テーマ、分析テーマ、現象特性の継続的吟味と、分析ワークシートによる継続比較分析を通して、コア・カテゴリーの輪郭を早くから見いだそうとする試みそれ自体が、コア・カテゴリーとそれに連なる主要なカテゴリーとを、コンパクトにまとめあげるのである<sup>4</sup>。

#### 4. 展望

今回は、第 2 章「死の予期の多様性：社会的定義の問題」を読んでゆく。この章は、M-GTA でいう「現象特性」や「分析焦点者（分析ポイント）」について再考するのに、格好の材料であると思われる。短い章ではあるが、またじっくりとみてゆくことにしよう。

- <sup>1</sup> 第1章の別のところで、ゴフマンの相互作用論との対比のもとに、ここで述べたのと同じことを別のことばで説明している——「〔ゴフマンのように〕相互作用の安定性に焦点を置くよりも、本書は、相互作用の展開過程で生ずる変化に主眼を置いた」（14頁）。
- <sup>2</sup> 継続的思考の重要性は、木下先生も次のように（私よりも上品に！）指摘されている——「…分析を始めたら極力中断しないことである。修正版 M-GTA ではとくに強調したい点である。同時並行の思考作業は稼動するまでに集中力を必要とするし、動き出せば相互に関連がみえてくるから相乗効果の展開となる。だから、思ったほど困難ではないのだが、中断してしまうともう一度稼動体制まで自分をもっていかなくてはならないからである。」（木下, 2003: 208）
- <sup>3</sup> そもそも、インパクトのある理論は往々にしてシンプルな構造をもっていないだろうか。
- <sup>4</sup> ここで恐れている誤解とは、もちろん、こうした試みがグラウンデッド・オン・データの原則以上に優先されてしまうことである。また、こうした試みを研究の初期段階からしたからといって、必ずしもすぐにコア・カテゴリーの輪郭が見えてくるとは限らないことも、確認しておきたい。

### <引用文献>

- 木下康仁（1999）『グラウンデッド・セオリー・アプローチ——質的実証研究の再生』東京：弘文堂。
- 木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い』東京：弘文堂。
- グレイザー, B・ストラウス, A（1988）『死のアウェアネス理論と看護——死の認識と終末期ケア』木下康仁訳, 東京：医学書院。
- グレイザー, B・ストラウス, A（1996）『データ対話型理論の発見——調査からいかに理論をうみだすか』後藤隆・大出春江・水野節夫訳, 東京：新曜社。

### ◇編集後記

- ・5月31日に2008年度の総会が行われました。総会資料を添付しましたのでご覧下さい。新入会員の方のために研究会の規約も添付しました。
- ・今回の研究会は、研究発表4題という、過去最大のボリュームでした。同じデータを別々に分析するという新たな試みについても発表されました。内容も濃かったので、みなさん最後はお疲れモードでした。最後の発表者の方には、ちょっと気の毒でした。やっぱり人間の集中力には限界がありますよね。わかってはいたんですが…。で、今回のニューズレターはこんなボリュームになりました！読み応えたっぷりですね。
- ・山崎さんのコラムも佳境に入ってますね。このコラムの熱いファンもいるようです。なので原稿は落とせませんね。大変ですけど連載がんばってください！
- ・今年も7月26日（土）、27日（日）の日程で、山梨の神の湯温泉（去年と同じところ）にて研究合宿を行います。分析はかな〜り集中を要するので疲れますが、ここの温泉がとていい！ので、ほんとに癒されます（木下先生もお気に入り）。天気がよければ富士山も見えるみたいです（去年は残念ながら見えず）。しっかり頭を使ったあとは、モードを切り替えて温泉に浸かってのんびりして、宴会で盛り上がりましょう！定員まであとわずかみたいなので、申し込みはお急ぎ下さい。佐川記